

**科学研究費助成事業 研究成果報告書**

平成 28 年 11 月 30 日現在

機関番号：82612

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2013～2014

課題番号：25861042

研究課題名(和文) 乳幼児虐待防止のためのハイリスク母親に対する親子関係支援プログラムについての研究

研究課題名(英文) Research of a new support program for mothers at high risk of child maltreatment

## 研究代表者

立花 良之 (TACHIBANA, YOSHIYUKI)

独立行政法人国立成育医療研究センター・その他部局等・その他

研究者番号：50589512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、児童虐待のハイリスクとされる、自閉症傾向を持つ母親に対する親子関係支援プログラムの開発とその効果検証を行った。敏感な情緒応答性を向上させ、育児ストレスを軽減することを目的とした介入プログラムを実施したところ、3か月後の育児ストレスが介入群が対照群に比べ統計的に有意に低下した。自閉症傾向を持つ母はその認知特性により育児困難を持ちやすく、個々のニーズに合わせた支援が必要であると考えられた。

研究成果の概要(英文)：We developed a new support program for mothers with autism spectrum disorder(ASD) traits. We also investigated the effectiveness of the program. We developed an intervention program for mothers with ASD traits. The program aimed at to enhance their emotional sensitivity towards their children and to decrease their parenting stress. The results revealed that the program decrease their parenting stress. Our study also revealed that mothers with developmental disorder traits often have difficulties in daily life related to their cognitive deficits. Tailor-made supports for those mothers matched with their individual needs are thought to be essential.

研究分野：乳幼児精神医学

キーワード：乳幼児 児童虐待予防 発達障害 自閉スペクトラム症 育児支援

## 1. 研究開始当初の背景

母親を取り巻くさまざまな心理社会的因子の中で、母親の自閉症傾向が最も児童虐待と高い相関を持つことが明らかとなっている(笠原ら、2011)。笠原らの研究では、妊娠中期の妊婦に Pervasive Developmental Disorders Autism Society Japan Rating Scale (PARS) ショートバージョンを自記式で母親に回答してもらい、産後1年後の調査で児童虐待の有無を調べ、自記式 PARS ショートバージョンのスコアと、児童虐待が高い相関を持った。このことから、自閉症傾向を持つ母親は、児童虐待のハイリスクであることが明らかになった。しかし、妊娠中期に児童虐待のハイリスクの母親を同定できても、それらの母親に対する有効な介入方法に関してはいまだ開発されていない。

児童虐待を予防するうえでは育児ストレスを軽減することが極めて重要である(Holden et al., 1996)。親子の愛着を深めることで、育児ストレスは軽減する(Teti et al., 1991)。児童虐待のハイリスクの親は親子の愛着が不安定であるが、親子の不安定な愛着を改善するために、母親の敏感な情緒応答性の向上が重要であるとされている(Wolfe et al., 2011)。ここでいう敏感な情緒応答性とは、子どもの気持ちやしたことにより丁寧に感じ認めてあげるようなかわりを意味する(Sroufe, 1989)。親子の愛着を深める生活介入プログラムの研究が数多く行われているが、それらのメタアナリシスの結果として、母親の子どもに対する敏感かつ肯定的な情緒応答性を高めること、介入プログラムにおける親の負担が少ないことが、愛着を深めるのに効果ある生活介入研究の特徴であることがわかっている(Bakermans-Kranenburg et al., 2003)。自閉症傾向を持つ親の養育問題についての研究は申請者の知る限りほとんど行われていない。自閉症傾向を持つ成人は、他者の気持ちを認識することが苦手である(Howlin, 2008)。そのため、子どもの出す要求のサインにも鈍感で、母子間の情緒的な相互交流が生じづらいことが予想される。

申請者は、母親の子どもに対する敏感な情緒応答性を高め、幼児とその母親の愛着を高めることで育児ストレスを軽減する生活介入プログラムを開発し、その効果を無作為化比較対象試験で実証した(Tachibana et al., 2009, Tachibana et al., 2012)。また、申請者は Manchester 大学医学部児童精神科および Royal Manchester Children's Hospital に2010年から2012年まで留学し、母親の敏感な情緒応答性を向上させ自閉症児とその母親の相互交流の質を改善することで、児のコミュニケーション力を向上させる介入プログラム(Green et al., 2010)を学んだ。

また、自閉症児にどのような介入方法が効果的についてのメタアナリシスの研究を行った(Tachibana et al., 2012)。これらで得た知見をもとに、母親の敏感な情緒応答性を向上させることで母親の育児ストレスを軽減し児童虐待を予防するような介入プログラムの開発の着想に至った。さらに、申請者は、アメリカで開発された乳幼児期の親子相互作用や関係性をアセスメントし支援するプログラムである NCATS (Nursing Child Assessment Teaching Scale) と NCAFS (Nursing Child Assessment Feeding Scale) を学び、使用者ライセンスを得た。このプログラムでは、乳幼児が親に出す情緒サインを同定し、それが母子関係の中でどのように読み取られかつ応答されているかをアセスメントし、それを親にフィードバックするものである。母親の敏感な情緒応答性を高めることにより、自閉症傾向を持つ母親と児の愛着を高め、育児ストレスを軽減する可能性が考えられた。

## 2. 研究の目的

先行プログラムをもとに、乳幼児が出す Cue を母親が読み取ることを手助けすることで母親の敏感な情緒応答性を高め、自閉症傾向を持つ母親と児の愛着を高め、育児ストレスを軽減するような生活介入プログラムを開発し、その効果をエビデンスレベルの高い無作為化比較対象試験にて検証することを目的とした。

## 3. 研究の方法

1) 自閉症傾向を持つ母親について、児童虐待のハイリスクとなる要因を調べることとした。平成24年度に行われた世田谷区的全分娩施設を対象とした妊産褥婦のメンタルヘルスに関するコホート調査データの二次利用して解析した。

2) 国立成育医療研究センターこころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科外来を受診している、自閉症傾向を持つ母親の育児上の問題点を抽出した。

3) 上記1.2を踏まえ、児童虐待のハイリスクである、自閉症傾向を持つ母親の特性に合わせた、視覚優位性を生かした育児支援プログラムを開発することとした。プログラムの内容は、敏感な情緒応答性を向上させ、育児ストレスを軽減することを目的とした。

4) 国立成育医療研究センター産科で出産した母親の中で、妊娠中期のスクリーニングにより児童虐待のハイリスクである発達障害傾向があることが考えられる妊婦24人を対象として、無作為化比較対象試験により、上記プログラムの効果を検証した。24人を無作為に介入群と対象群に分け、Wait list control design で、介入群には介入プログラムを2週間おきに6セッション(3か月間)

対照群には従来通りの治療を行った。また、3 か月後に対照群には同様に介入群と同じプログラムを6セッション(3か月間)行った。主要評価項目は育児ストレスインデックス合計点とした。

#### 4. 研究成果

コホート調査の二次データ解析の結果、虐待傾向の危険因子としては、自閉症傾向、子どもの数が多いことが挙げられた。また、虐待の危険因子としては、注意欠陥多動障害の傾向、子どもの数が多いこと、若年、家事ができないこと、があげられた。

国立成育医療研究センターこころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科外来を受診している、自閉スペクトラム症の母親の育児上の問題点として、児が思い通りにならないことに対するいらだち、児に対して押しつけの傾向があり感情に対する共感性の乏しさがあつた。また、否定的感情や攻撃性が強くより児童虐待のリスクの高い症例では、周囲と関係性を気づきにくく、孤立しやすい傾向が見られた。

これらをふまえ、作成した介入プログラムを実施したところ、3 か月後の育児ストレスインデックス合計点において介入群が対照群に比べ統計的に有意に低下した。

本介入プログラム実施を通して、育児困難を来しやすい自閉症傾向をもつ母親に対して、子どもの発達に関する心理教育により理屈で児のニーズを説明すること、母子合同面接にて児に対して受容的な言動を治療者が具体的にモデリングすること、プレイセッションをビデオで録画するなどして視覚的に母の児へのかかわりで良いところを母に見せ良い育児行動を強化すること、また、ビデオフィードバックの中で児の行動から見られる気持ちを映像を見せながら示すことで共感性を促進するような心理教育が有効と考えられた。また、家事のマネージメントがうまくいっていなかったり、子どもが多くて育児に余裕がなくなっている母親に対しては、ヘルパーなどの社会サービスの積極的利用や、地域保健師の相談の利用をすすめることが有効と考えられた。

自閉症傾向を持つ母には、その認知特性により育児困難を持ちやすく、持っている困難さに応じた育児支援が必要であることが示唆された。どのような育児困難を持つかは多様であり、母のニーズに合わせたテーラーメイドの支援が必要であると考えられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 5 件)

英文原著(査読有)

1. Tachibana Y, Koizumi T, Takehara K, Kakee N, Tsujii H, Mori R, Inoue E, Ota E,

Yoshida K, Kasai K, Okuyama M, Kubo T  
Antenatal risk factors of postpartum depression at 20 weeks gestation in a Japanese sample: psychosocial perspectives from a cohort study in Tokyo. PLOS ONE; doi: 10.1371/journal.pone.0142410, 2015.

和文原著(査読有)

1. 立花良之、小泉典章、樽井寛美、赤沼智香子、鈴木あゆ子、石井栄三郎、鹿田加奈「メンタルヘルス不調の母親とその子どもの支援のための、妊娠期からはじまる医療・保健・福祉の地域連携モデルづくりについて」子ども虐待とネグレクト(印刷中)

2. 小泉典章、立花良之「精神保健と母子保健の協働による周産期メンタルヘルスへの支援」子ども虐待とネグレクト、231-235、vol.18.No.2、2016

3. 立花良之、小泉典章「母子保健活動と周産期・乳幼児期の精神保健」精神科治療学、97-103、vol.31.No.2、2016

4. 立花良之、妊娠・出産・育児にかかわる各時期の保健福祉システムの現状とあり方、精神医学、127-133、vol.58、No.2、2016

[学会発表](計 14 件)

1. 立花良之、辻井弘美、竹原健二、掛江直子、森臨太郎、奥山眞紀子、久保隆彦「妊娠期における養育不全・児童虐待の危険因子についての研究 東京都世田谷区における全分娩施設を対象とした疫学調査の結果から」第111回日本精神神経学会+総会、大阪、2015.6.4

2. 仁田原康利、立花良之、奥山眞紀子「注意欠陥多動性障害の親子治療により母子関係の改善が得られた一例」第14回東京児童青年臨床精神医学会、東京、2015.4.11

3. 立花良之「世田谷区の母子保健関係者の協議会『母と子のサポートネットせたがや』の活動について」第14回世田谷区医師会医学会(招待講演)、2014.12.6

4. 立花良之、杉浦伸一、竹原健二、中川真理子、久保隆彦、辻井弘美「身体疾患患者のメンタルヘルス不調に対する早期介入のための、かかりつけ医と精神科医の連携をサポートする患者紹介システム開発について」、東京、2014.12.6

5. 立花良之、竹原健二「メンタルヘルスのハイリスク妊産褥婦への地域のサポートの実情と今後の課題について」第73回日本公衆衛生学会総会、宇都宮、2014.11.5

6. 立花良之、小泉智恵、辻井弘美、竹原健二、森臨太郎、掛江直子、奥山眞紀子、久保隆彦、「養育不全・児童虐待予防のために学会集會、大阪、2014.7.13

7. 立花良之、小泉智恵、辻井弘美、竹原健二、森臨太郎、掛江直子、奥山眞紀子、久保隆彦、「妊娠中から気を付けるべき、産後のメンタルヘルス不調の母親のリスク因子に

ついでの研究」第 55 回日本児童青年精神医学会総会、浜松、2014.10.12

8. 立花良之、竹原健二、久保隆彦、森臨太郎、掛江直子、辻井弘美、奥山眞紀子 「養育不全・児童虐待予防のための妊娠期からの医療・保健・福祉の地域連携 「母と子のサポートネットせたがや」の取り組みと課題」 第 6 回日本子ども虐待医学研究科会

9. 立花良之：発達障害の見立て、第 110 回日本精神神経学会学術総会シンポジウム「専門医受験者のための小児精神医療入門(2)子どもの「見立て」」、横浜、2014.6.28

10. 立花良之：メンタルヘルス不調の母とその養育のサポートのための多職種地域連携 東京都世田谷区での取り組み、第 110 回日本精神神経学会学術総会シンポジウム「メンタルヘルス不調の母親とその子供の養育を支援する地域連携システム 母子保健における G-P ネット」、横浜、2014.6.27

12. 立花良之 「うつ病早期発見早期介入のためのかかりつけ医-精神科医連携システムを母子保健に生かす 周産期の母親サポートにおける G-P ネット」日本子ども虐待防止学会第 19 回学術集会信州大会（日本子ども虐待防止学会主催）、松本、2013.12.14

13. 立花良之 「うつ病の妊産褥婦に対する医療・保健・福祉の地域連携による支援体制の構築に向けて～周産期 G-P ネット～」 第 54 回日本児童青年精神医学会総会（日本児童青年精神医学会主催）、札幌、2013.10.12

14. 立花良之、小泉典章、竹原健二、久保隆彦、森臨太郎、掛江直子、小泉智恵、日下華奈子、辻井弘美、奥山眞紀子 「乳幼児虐待予防のための、医療・保健・福祉の多職種連携の問題点について 周産期の母親のメンタルサポートの観点から」、第 5 回日本子ども虐待医学研究会・学術集会（日本子ども虐待学研究会主催）、東京、2013.7.21

〔図書〕(計 1 件)

1. 立花良之、「母親のメンタルヘルスサポートハンドブック 気づいて・つないで・支える多職種地域連携」 医歯薬出版、2016

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

該当なし

取得状況(計 0 件)

該当なし

〔その他〕

ホームページ等

母と子のサポートネットせたがや

<http://hahatoko-setagaya.com/>

6. 研究組織

(1)研究代表者

1. 氏名：立花良之

2. 氏名のローマ字表記：Yoshiyuki Tachibana

3. 機関名：国立研究開発法人国立成育医療研究センター

4. 所属部局名：こころの診療部乳幼児メンタルヘルス診療科

5. 職名：医長

6. 研究者番号：50589512

(2)研究分担者

なし

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

1. 氏名：辻井弘美

2. 氏名のローマ字表記：Hiromi Tsujii

3. 機関名：国立研究開発法人国立成育医療研究センター

4. 所属部局名：こころの診療部

5. 職名：心理療法士

6. 研究者番号：20455413